

<目的> その1では幼児自身の自我の発達について検討したが、本報では母親が幼児の被服に対する自我の発達をどの程度理解し、幼児の被服環境にそれらを反映させているか、さらに母親自身の被服についての態度などが幼児に与える影響について考察した。

<方法> 調査対象者および調査時期はその1と同様である。調査内容は基本属性に関する4項目、子ども服の購買行動に関する9項目、母親から見た幼児の被服行動に関する14項目、母親自身の被服についての態度などに関する14項目である。調査データは、平均値の差の検定、因子分析、因子得点間における相関分析などにより解析した。

<結果> 平均値の差の検定より、母親から見た幼児の被服行動は男児より女児の方が「服を購入する時自己主張をする」、「洋服の好き嫌いがはっきりしている」、「色や柄の好みを言う」などの項目の評価値が大きく、危険率0.1%で男児・女児間に有意差が認められた。男児より女児の方が被服に興味をもち始め、嗜好がはっきりしてくる傾向にあった。因子分析により母親から見た幼児の被服行動は5個の基本的因子（固有値1.0以上、累積寄与率66.2%）が抽出され、これらの因子は主張性、満足度などであった。母親自身の被服についての態度では6個の基本的因子（固有値1.0以上、累積寄与率70.7%）が抽出され、これらの因子はファッションアドバイス、流行性などであった。幼児の被服行動と母親の被服についての態度との関連は、相関係数の有意性の検定の結果、幼児の第1因子（主張性）と母親の第1因子（ファッションアドバイス）、幼児の第2因子（満足度）と母親の第1因子、幼児の第2因子と母親の第3因子（流行性）などの間に相関がみられた。